

第43回国際公文書館円卓会議 (CITRA) 全体セッション報告

# 被災アーカイブズを救え！

## －「悲惨」から「明日への希望」の発見へ

国立公文書館長

高山 正也 たかやま・まさや

### 1. 東日本大震災の概要

日本国立公文書館長の高山です。歴史と文化遺産に恵まれたトレドの地に来ることができて、ここで去る3月に起こった東日本大震災について報告するということが大変感慨深い思いがある。

2011年3月11日午後2時46分、日本の東半分を、巨大な地震が襲った。地震の規模はマグニチュード9.0、観測史上世界4番目の非常に強いマグニチュードを観測した。

そして地震発生からおよそ30分後、我が国の歴史上最大といわれる巨大津波が日本の太平洋岸を襲いこの未曾有の地震と津波により、沿岸地帯の多くの建物や港湾施設が崩壊し、広範な沿岸地域で液状化現象も報告され、死者・行方不明者は約20,000人、被害総額は16兆9千億円と推計されている。福島ヒーローの献身的な努力も空しく、福島第一原子力発電所では予備電源が失われ、非常に深刻な原子炉災害が発生し、多くの近隣住民が避難生活を余儀なくされている。

政府はこの地震を、東日本大震災、と命名した。我々日本人の価値観や生き方をも変えてしまうような、まさに千年に1度といわれる災害であった。

去る6月に、貴国スペインのバルセロナを訪れた現代日本の世界的に著名な作家、村上春樹は、「日本人は『無常観』と共に生きている」と言った。無常観とは、仏教から来た世界観で、この世の全てのものはやがて消滅し、永遠の安定や不変不滅のものなどは無い、という考えである。日本人は数多くの災害を経験しているが、ある意味それを逃れられないものとして受入れ、逆に前向きな姿勢で困難を克服し長い歴史を生き抜いてきた。す

なわち、壊れた家は建て直せばよいし、崩れた道路は修復すればよい、壊滅した都市も復興できる。今次の災害も国をあげての復興・変革の時が来た、と多くの日本人は捉えている。

### 2. 国立公文書館における取り組み

当館ではまず、震災発生後の3月18日、当館のホームページにおいて、私の名前で、被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げた。

6月9日の国際アーカイブズの日で開催した全国公文書館長会議では、「東日本大震災への対応について」を議題の1つとして取り上げ、当館が行った被災状況調査の結果を紹介したほか、各館からの詳細な報告を受け、意見交換を実施した。

その後も、我々としてできる限りの支援を行うべく、被災地の要望を把握しながら、以下のような活動を実施した。

- 被災地域の公文書館等の被災状況についての実地調査及び救済に関する意見交換
- 岩手県で開催された「東日本大震災水損資料復旧プロジェクト報告会」に当館職員が参加し、実地研修や被災状況視察等を実施
- 7-8月に宮城県、岩手県に当館職員を派遣し、ボランティア組織である東京文書救援隊とともに被災資料への復旧処置システムの導入とスキルトレーニングを実施
- 今後決定される補正予算による財政措置を想定し、新たに被災公文書等修復事業に着手。

9月から、岩手県宮古市からの要請を受けて、被災した公文書等の修復作業を実施。事業は13日間にわたり、館から9名の職員を派遣し、必要となる機材及び消耗品を無償で提供、現地で

修復作業を行う修復補助員を雇用し、技術研修の実施と修復作業を行った。その結果、合計5,036枚の水損文書を修復した。この事業に続き、新たな被災公文書修復支援事業を始める予定である。

### 3. 政府の取り組み

政府全体の動きとしては、今回の震災の記録保存の必要性が早い段階から認識されていた。最も早い動きは内閣官房副長官による指示で、将来の大震災に備え、各府省において、今般の震災の事実経過の記録や資料等の保全について留意するように、との指示が出された。

震災から1ヶ月を機に、内閣総理大臣の下に有識者からなる「東日本大震災復興構想会議」の設置が決定され、東日本大震災からの総合的な復興に向けた議論を重ねた結果を具体的指針に反映させることとなり、「復興への提言－悲惨のなかの希望」を総理大臣に提出した。

提言では「復興構想7原則」の第一原則で、「失われたおびたしい「いのち」への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとって復興の起点である。この観点から、鎮魂の森やモニュメントを含め、大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する。」として震災の記録の保存と継承、並びに情報の発信を掲げた。

6月には「東日本大震災からの復興の基本方針」が決定され、今後10年間で復興期間として取り組みを進めていく方針を示し、復興の基本方針においては以下に示す記録及びアーカイブの保全、保存、修復に関する事項が盛り込まれた。

- 「地域のたから」である文化財や歴史資料の修理・修復
- 今回の大震災に関する国際共同研究を含めた詳細な調査研究の実施
- 上記の調査研究の結果を踏まえた地震・津波災害、原子力災害の記録・教訓の収集・保存・公開体制の整備
- 被災地域における公文書等の保全・保存

- 情報通信技術を活用した、これらの記録・教訓及び地域情報、書籍など関係する資料・映像等のデジタル化の促進
- こうした記録等についての、国内外を問わず、誰もがアクセス可能な一元的に保存・活用できる仕組みの構築、国内外への情報の発信

### 4. アーカイブズ関係機関による被害状況の収集と保全活動

震災発生直後から、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）は、国内の各機関会員の被災状況について調査を開始し、その結果をホームページに掲載した。また、内閣総理大臣をはじめ、全国都道府県知事会等に被災資料の救出保全、震災関連文書の保存について、要望活動も行った。

文化庁は、1995年の阪神淡路大震災の経験を活かし、震災から20日後には文化財レスキュー事業を立ち上げ、緊急に保全措置を必要とする文化財を救出し、応急措置を行い、安全な施設で一時的保管を行う活動を開始した。文部科学省所管の関係団体を中心となり、被災した各地方自治体と連絡をとりつつ、修復専門家の派遣を行い、この事業を通じて津波により水損被害を受けた公文書や古文書を含む文化財の保全作業を本格的に始めた。この事業には、全史料協もメンバー機関として参画した。

民間の研究者たちも立ち上がった。日本では、1995年の阪神淡路大震災後に災害によって被害を受けた歴史資料の救出・保全を目的として、被災地域の大学教員や学生、史料保存機関職員、歴史研究者などがボランティアとして活動する「資料ネット」と呼ばれるグループが各地に誕生していた。被災地域の1つである宮城県では、宮城歴史資料保全ネットワーク（宮城資料ネット）が活動を行っていたが、今回の震災でもただちに被災地宮城県で保全活動にあたった。

### 5. 今後の課題

－記録の保存から生まれる明日への希望

大震災から7ヶ月間の政府やアーカイブズ関係

者・関係機関の災害対応について概観してきたが、最後に、我々が直面している課題を3つ挙げておきたい。

1つは、被災した記録資料の復旧、保全である。今回の水損資料の復旧・修復活動からの教訓の一つとして、識別救急 (toriage) に類する対応の必要性が挙げられる。一度に多くの被災資料が発生したため、修復にあたる人材及び設備が不足する状況の中で、歴史的資料の価値が様々な被災資料を専門の如何を問わずアーキビストが応急的に評価・選別し、優先して救済を行うべき資料を選び出す作業が必要となったのである。原子力発電所の事故により被爆した記録資料の復旧方法という大きな課題も残されており、今後世界の専門家の助力を請うことになるだろう。様々な課題に取り組みつつ、被災資料の復旧、保全に継続的に取り組む必要がある。

2番目に、記録資料の防災対策の見直しである。震災では、広い地域で停電の状態が長く続いたために、電子文書の保存についても課題が浮かび上がった。多様な媒体の記録や基幹記録 (vital records) の非常・被災状態下での利用のため、まず今回の震災による被害の検証を徹底的に行い、防災とともに、非常状態下での利用に関する調査研究を行うことが急務である。

3番目に、今回の災害の記録の収集、保存、公開についてである。私たちは、今回の大震災の記録を次の千年間、伝え続けるとともに、世界の関係者とも共有していかなければならない、と考えている。

地震と津波によって、被災地域の何十万もの

人々が、愛する家族や友人を失い、これまで生きてきた人生の場を、ふるさとを、失ってしまった。被災地の救援に真っ先に入り、瓦礫の除去と処理までを担当した自衛隊は、見つけた多くの写真やアルバムを回収し、避難所に届けた。被災した人々が瓦礫の山の中から探し求めたのは、預金通帳でも金品でもなく、家族の写真や、卒業証書、手紙、日記などの経済的に無価値ではあっても、思い出の残る品々であった。何もかも失って、明日を生き抜く希望を得るために、人々が心の縁 (よすが) として探し求めたのは、一人一人の人生、あるいは自分が暮らしたコミュニティの記録としてのアーカイブズだったのである。

今回、日本国立公文書館長として、ここCITRAの場で報告の機会を与えていただいたことを感謝している。このたびの震災に際し、ICAの同僚の皆さんから、数多くの励ましのメッセージをいただいた。この場を借りて謝意を表したい。2012年のICAブリスベン大会では、より多くの日本のアーキビスト、修復家たちによる、東日本大震災に関するセッションを組織したいと考えている。

現実は何時の世でも変化し続けるのが定めであると考え「無常観」に基づき、日本人は人の作ったものはたとえひとたびは滅びても、人の手でふたたび復興できると信じている。この大きな災害を世界の皆さんとの連帯の下に、その信念を復興への歩みの力とし、明日への希望に満ちた活動に変えられると確信している。

ご静聴ありがとうございました。